

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25871066

研究課題名(和文) 博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明

研究課題名(英文) The Formation Mechanism of 'Authentic Culture': An International Comparison of the Renewal Processes of Museum Exhibitions

研究代表者

太田 心平(OTA, Shimpei)

国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・准教授

研究者番号：40469622

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：博物館の展示は、基盤となる学問領域の研究成果をもとに構築されるが、その他にも展示する標本資料の収集や選定、解説の作成と配置、演示やサービスなどの付加要素によっても、違った質や性格や印象をもつ。この研究は、日本、韓国、米国で韓国・朝鮮文化に関する常設展示をもつ博物館を主な事例とし、それらの付加要素が、一般に想定されてきたように、研究者やソースコミュニティ(この場合は韓国社会)の意図のみによって構築されるのではないことを明らかにした。展示の内容は、研究者以外の様々な関係者たち(博物館の正規/非正規事務職員、外部委託従事者など)の裁量的なはたらきかけにも、無視できないほど左右されることがわかった。

研究成果の概要(英文)：Exhibitions of museums are characterized not only by the academic research that they are based on, but also such additional factors as collections and selections of the materials, documentations and layouts of the explanations, and displays and services. This study examined the permanent exhibitions of Korean cultures in museums in Japan, South Korea and the United States, to reveal that those additional factors limitedly reflects researchers and source communities --- Korean people and their society in this case --- that the literature argued. The most obvious conclusion goes to that the actions and discretions by the other people such as the regular / part-time workers at the museums, outsourced employees concerned are important factors to be reckoned with the exhibitions.

研究分野：社会文化人類学、北東アジア研究、博物館学

キーワード：社会文化人類学 韓国・朝鮮研究 博物館展示学 博物館経営学 組織行動

1. 研究開始当初の背景

韓国文化の需要と供給が各地で高まっている。世界の民族学博物館が置かれた現況は、それを如実に物語っている。社会的関心の高まりを受け、韓国展示の需要が各地で急増している。かつ、この分野の展示の最先端は、20世紀には日韓の研究者が先導してきたが、近年では第三国でも優れた人材が増えた。こうした状況のなか、第三国の民族学博物館でも韓国展示の新規導入ないし規模拡大がはじまろうとしていた。また、この分野の先導役を務めてきた日韓の博物館でも、大規模な新構築が計画されていた。ただ、各博物館の作業チームは、相互に没交渉の状態にあった。

偶然にも、この韓国展示の世界的新構築作業は、知識人類学と博物館展示学の基礎が成熟した直後に起きた。これらは、文化展示の哲学的諸問題の整理を前提とし、博物館が研究者から大衆への権威的知識の押し付け装置だったという批判を教訓に、成功例と失敗例の網羅のあとに進められ、既存の博物館展示の課題を超克しようという新しい流れだと期待された。この点で、博物館学の視座から着目する価値も高かった。

研究開始までに受託者は、綿密な現地調査と史料解釈にもとづく知識人類学的研究により、韓国・朝鮮文化の脱構築を先導してきた。特に3つの科研費により、研究者や有識者の権威的知識が、韓国の社会文化を再帰的に規定していることを、可視化することに成功してきた。若手研究(特別研究員奨励費)(平成16~17年度)では、韓国の現代政治史に関する創られた物語が、韓国人の認識や行為を規定する様相を検証した。若手研究(スタートアップ)(平成20~22年度)と若手研究(B)(平成22~24年度)では、韓国・朝鮮の「真正な文化」の体現者とされる「両班」の範疇やイメージが、近代と植民地期に創られたものであることを立証した。かつ、この植民地主義的近代を先導したのが、先行研究の述べるエージェントではなく、むしろそれより下位に存在した複合的エージェント(実業家や物書きなど)であったことを論証した。これらは韓国・朝鮮の事例を越え、知識人類学や政治人類学の通文化的理論にも敷衍できるものだった。結果、当該分野を先導する研究者として国内外の共同研究や招聘講演に招かれ、若手研究者としては例外的に、国内外で韓国・朝鮮研究を統括する役割を担うようになりつつあった。

同時に受託者は、国内最大の民族学博物館で展示活動を展開し、韓国や米国でも博物館展示に寄与していた。展示物に関わる物質文化研究にも着手していた。

以上を同時進行させたことで、博物館展示とそれによる権威的知識の生成について、新しい視座を得ていた。それは、展示とそ

の権威的知識を創る主体が、研究者だけではないということである。研究者と、標本整理者やデザイナーなどの技能者、そして参与する一般職員による三者関係が、展示に結実するという視座である。

2. 研究の目的

本研究の文化人類学的な目的は、博物館における研究者、技能者、一般職の三者関係を注視し、権威的知識の生成過程と、現代の博物館展示が向かう方向を明らかにすることにあつた。これにともない、韓国・朝鮮の民族文化の権威的知識が生成されるメカニズムをさらに深く解明することも期待できた。

本研究には博物館展示学に寄与する目的もあつた。それは、博物館展示の先進的な事例の国際比較および総合的検討をおこうことであり、わが国の学界がもってきた韓国・朝鮮研究の国際的イニシアティブを、維持・発展させる目的もあつた。

3. 研究の方法

主たる研究事例として、アメリカ自然史博物館(米国)、国立民俗博物館(韓国)、国立民族学博物館(日本)の韓国展示の改装作業チームに対して、人類学的なインタビュー法と参与観察法による調査をおこない、結果を三点比較法で分析した。これら3館の改装準備の関係者のあいだで、知識と展示が創られていく作業を参与観察により記録した。また、それぞれの研究者、標本整理者などの技能者、一般職員という、異なる文化背景、異なる立場の作業従事者に、個別のインタビュー調査をおこなった。

本研究では、以上から得た各博物館の民族誌データを分析するにあたり、2つの先行理論を参照し、検証することを1つの足掛かりとした。第1は、研究者や有識者の言動は、既存の「真正な文化」の透明性を保証する「お墨付き」に過ぎず、新しい発見を求められるようなものではないという学説、「オーデット・カルチャー」で、第2は、専門職員と一般職員が協働する現場では、葛藤するはずの相互の知識体系が、実は相互無視によって調和するという社会的な新説、「モラル・グレー・ゾーン」だ。

また、これら3館の事例研究を補完するため、イェール大学図書館のアーカイブ部門(米国)、東亜大学博物館(韓国)、国立博物館(デンマーク)、国立民族学博物館(オランダ)でもインタビュー調査を行った。

4. 研究成果

包括すれば、いかに博物館展示が構築されるかがその博物館の組織行動に依存している度合いが予想以上に高いことが明らか

となった。つまり、博物館を研究対象とするうえで着目すべきファクターが、研究開始当初の想定以上に多く見つかった。

研究者と技能者と一般職員による三者関係というものは、たしかに博物館展示の内容へ影響する。が、そこでいう三者関係とは、研究開始当初に想定していた三者間の有機的協働のあり方だけに留まらない。なかでも、各個人の職業倫理ないし労働意欲の度合いと内実は、特に三者が何を誰にどうどれくらい伝えようとするかという点に直結し、博物館展示の構築結果とその過程を左右していることがわかった。たとえば、博物館は、制作側のデザイン業績や、来館者の嗜好性を満たすという技能者に高くみられる目標を、無制限に害することは出来ない。また、一般職員の雇用体系やその他の業務を侵害することも出来ない。よって、国や地域により異なる技能者の位相と評価のシステムや、一般職員の雇用制度および博物館で働くということに対する自意識および社会的地位などに、博物館展示の内容が左右される場合が多く比較観察できた。この一例で明らかなように、研究者が展示準備を統括する場合でも、知識人類学や博物館展示学の見識を十分に発揮できるわけではない。逆に、それを発揮することが知識の権威的独占や欺瞞として人類学的に批判できるほどとなる場合もあり、博物館展示の質を低めることとなった事例すら確認できた。このように、「オーデット・カルチャー」の学説は不十分な点が多い。

付随して、博物館展示が物質的な側面からも再検討されるべき必要性も明らかとなってきた。展示品や収蔵品の物質的な側面、予算規模やその使用規定といった経済的な側面、展示場や収蔵庫などの建物の建築的な側面、韓国・朝鮮研究についての展示に顕著な国際情勢や歴史認識という政治的な側面、同じく海外移民した者たち（韓国の人口の少なくとも10%以上）や海外長期在留者たちの文化をどうあつかうかという地理的な側面はもちろんであるが、それだけではない。時には、研究空間の構成から作業場の照度にいたるまで、博物館にかかわる人びとのほたらきを規定する物質的な要素が、展示構築にたずさわる人びとの職業倫理や労働意欲を介し、展示にどれほど向き合うか、どのような有機的協働をとげるかにも影響が強いことが観察された。これは当事者から聴き取った情報にも高い頻度であられるが、そうした認識論的な領域に留まらない存在論的な要素を強く含んだ問題である。よって、認識論的に構築された「モラル・グレー・ゾーン」についても、（現状でも多少で存在論的なアクター・ネットワーク理論を一部で組み込んでいるが）さらなる補完を求められるといえた。

以上のとおり、博物館展示に反映される構築過程の有機的協働の内実を解明するう

えでは、むしろ経営学で戦略や制度やリーダーシップとともに論じられてきた組織行動という概念を、いかに取り込んでいくかが重要であると結論づけること出来た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7件）

① A. DE VOOGT, S. C. OTA, J. W. B. LANG, "Work Ethic in a Japanese Museum Environment: A Case Study of the National Museum of Ethnology," *Bulletin of National Museum of Ethnology* 42(4): 1-14, 2018. 【査読有】

② S. C. OTA, "한국의 '헬 조선'과 일본의 내면지향: 상반되는 키워드로 읽는 양국 젊은이 문화 시론," 동아시아일본학회・동북아시아문화학회・일본문예연구회 (eds.) 『동아시아일본학회・동북아시아문화학회・일본문예연구회 2017년 추계 연합국제학술대회』: pp.22-28, Busan: 동아대학교 중국일본학부 일본학전공, 2017. 【査読無】

③ S. C. OTA, "이민동기의 비합리성: 2000년대 절망 이민과 2010년대 탈-헬-조선 이민과의 비교를 바탕으로," 서울대학교 인류학과 BK21 플러스사업단 (eds.) 『글로벌 한국학과 이주・이산의 인류학』: pp.221-230, Seoul: 서울대학교 인류학과, 2017. 【査読無】

④ 太田心平, 「移住への渴望——21世紀の韓国人外国移住者のユートピア性」, 東洋大学アジア文化研究所(編)『国境をまたぐ生活スタイル——アジアにおける広域調査と事例調査に向けて』 pp.36-44, Tokyo: 東洋大学アジア文化研究所, 2016年. 【査読無】

⑤ S. C. OTA, "Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement," *Senri Ethnological Studies* 91: 179-193, 2015. 【査読有】

⑥ 太田心平, 「民博の舞台裏で——展示にまつわる人びととその業務上の裁量」, 『民博通信』 144: 2-7, 2014年. 【査読有】

⑦ 太田心平, 「写真のマテリアリティ——現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論」, 神奈川大学国際常民文化研究機構(編)『国際常民文化研究叢書 3——東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』 pp.85-97, Yokohama: 神奈川大学国際常民文化研究機構, 2013年. 【査読無】

〔学会発表〕（計 17件）

① S. C. OTA, "일본 국립민족학박물관의 연구, 전시, 교육과 한국문화연구,"

경북대학교 대학 인문 역량 강화 사업 『동아시아를 바라보는 두 인류학자의 시선』, Daegu: 경북대학교 고고인류학과. (02/05/2018) 【招待発表】

② 太田心平, 「韓国の反日と親日、あなたはどっちを見る?」, 宮崎公立大学韓国文化研究会講演, Miyazaki: 宮崎公立大学. (11/11/2017) 【招待発表】

③ S. C. OTA, "한국의 '헬 조선'과 일본의 내면지향: 상반되는 키워드로 읽는 양국 젊은이 문화 시론," 동아시아일본학회·동북아시아문화학회·일본문예연구회 2017년 추계 연합국제 학술대회, Busan: 동아대학교. (2017/10/28) 【基調講演】

④ S. C. OTA, "문화 변동과 한국문화인류학의 과제 II 에 대하여," 한국문화인류학회 2017년도 가을 국제학술대회 『인간의 조건을 다시 묻다: 기술, 환경, 문화』, Jeju: 한화리조트. (10/21/2017) 【招待発表】

⑤ S. C. OTA, "Academic Hypothesis and Social Reliability: on the Dual Structure of the Korean Spiritual World," CASCA/IUAES2017: MO(U)VEMENT (a Joint Canadian Anthropology Society & International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Conference / InterCongress), Ottawa: University of Ottawa. (05/05/2017)

⑥ S. C. OTA, "Irrationality of Migration Motives: Comparison of Emigrants with No Hope in the 2000s and Escapees from Hell-Chosun in the 2010s," Department of Anthropology at Seoul National University & BK21Plus Group, "Global Korean Studies and Anthropology of Migration and Diaspora: Outbound Migration of Koreans and Korean Diaspora," Seoul: Seoul National University Asia Center. (10/22/2016) 【招待発表】

⑦ S. C. OTA, "The Enigmatic Legend of Feminized Men: A Sociocultural History of a Scholar-Bureaucrat Family in Gyeonggi Province," Colloquium Series on Korean Cultural Studie, New York: Columbia University. (04/28/2016) 【招待発表】

⑧ S. C. OTA, "The 386 Literature and 386 Sentiments: A Case Study of a Book Club in Seoul," Association for Asian Studies Annual Conference 2016, Seattle: Washington State Convention Center. (03/31/2016)

⑨ S. C. OTA, "Goryeo Celadon Porcelain Restoration Projects in Colonial Korea and the Outflow to Other Countries," Kick-off Symposium of NIHU Area Studies Program for Northeast Asia "Rediscovery of

Northeast Asia," Suita, Osaka: National Museum of Ethnology. (01/22/2016)

⑩ 太田心平, 「移住への渴望——21世紀の韓国人海外居住者のユートピア性」, 2015年度東洋大学アジア文化研究所研究集会/平成27年度白山社会学会大会『国境をまたぐ生活スタイル——東アジア・東南アジア・南アジアの事例を通じて』, Tokyo: 東洋大学. (07/25/2015) 【招待発表】

⑪ S. C. OTA, "The Utopist Genealogy of South Korean Immigrants in New York in 21st Century," SIEF2015 (12th Congress of Société Internationale d'Ethnologie et de Folklore) "Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st Century," Zagreb: University of Zagreb. (06/23/2015)

⑫ S. C. OTA, "Failure Teaches Success: A Miscommunication between Source Community and Researchers," International Workshop "Collaboration with Source Communities in the Exhibition of Collections and Media in Ethnological Museums," Suita, Osaka: National Museum of Ethnology. (03/10/2015)

⑬ 太田心平, 「現在進行形の海外移民——韓国を去りゆく人びとの胸のうち」, 第433回回みんぱくゼミナール, Suita, Osaka: 国立民族学博物館. (06/21/2014)

⑭ S. C. OTA, "Sweet Memories: Counter Narratives of South Korea's Democracy Movement," International Symposium "Social movements and the production of knowledge: politics, identity and social change in East Asia," Suita, Osaka: National Museum of Ethnology. (2/22/2014)

⑮ 太田心平, 「消費されるガラス乾板写真——植民地朝鮮と現代韓国の一関係性」, 神奈川大学国際常民文化研究機構第4回公開発表会『人・モノ・情報の交換におけるダイナミズム——東アジアの物質文化からみた普遍性と独自性』, Yokohama: 神奈川大学. (11/23/2013)

⑯ S. C. OTA, "Identities and Regulation in Museum Backyards," International Workshop "Documentation and Recording of the Ethnographical Objects in the Museums," St. Petersburg: Russian Museum of Ethnography. (9/25/2013)

⑰ S. C. OTA, "Comments from Korean Studies," International Workshop "Possibility of New Asian Exhibitions as a Practice of Inter-Disciplinary Liberal Arts," Suita: National Museum of Ethnology. (06/06/2013)

[図書] (計 5件)

① 太田心平, 「脱ヘル朝鮮という希望——もうひとつの非政治経済的な移民動機の事例研究」, 瀬川昌久編『越境者の人類学——家族誌・個人誌からのアプローチ』 pp.75-91, Tokyo: 古今書院, 2018年. 【査読無】

② 上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大(編), 『東アジアで学ぶ文化人類学』, Kyoto: 昭和堂. (257頁), 2017年. 【査読無】

③ 太田心平, 「家族と親族——韓国と日本の血縁から考える」上水流久彦・太田心平・尾崎孝宏・川口幸大編『東アジアで学ぶ文化人類学』 pp.27-43, Kyoto: 昭和堂, 2017年. 【査読無】

④ 太田心平, 「韓国における日本文化論の再生産——韓国の大学の学科目と研究者育成の分析から」, 桑山敬己(編)『日本はどのように語られたか——海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』 pp.407-434, Kyoto: 昭和堂, 2016年. 【査読無】

⑤ 太田心平, 「写真のマテリアリティ——現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論」, 神奈川大学国際常民文化研究機構(編)『国際常民文化研究叢書3——東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』(査読無), Yokohama: 神奈川大学国際常民文化研究機構: 85-97, 2013年. 【査読無】

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0件)

○取得状況 (計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

太田 心平 (OTA, SHIMPEI C.)

国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・准教授

研究者番号：40469622